

Title	フッサールの時間論 (1)
Author(s)	里見, 軍之
Citation	哲学論叢. 4 P.1-P.24
Issue Date	1979-03
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/66756
DOI	10.18910/66756
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

フツサールの時間論 (1)

里見軍之

一、はじめに

二、前経験的時間

(1) 準時間的秩序

(2) 時間化

(以下次号)

三、経験界の時間

(1) 現象的時間

(2) 客觀的時間

(3) 相互主觀的時間

四、意識生の時間

(1) 自己時間化

(2) 生き生きとした現在

一、はじめに

このところ時間論が隆盛であり、特にフッサールの時間論に触れた研究もかなり発表されている。いま改めて屋上に屋を架そうとしているのであるが、それには多少の理由もないではない。フッサールは一九一三年には、時間の問題は「本質的には一九〇五年に決着をみた」(III, 198, Anm.)⁽¹⁾とは言っているが、⁽²⁾実際はその後度々再考せざるを得なかった。彼の「時間」研究はほぼ四十年間に涉つて起伏に富んだ展開をみせており、われわれにとつて、その全体像は容易には測り知れないところがある。ところが彼の長年の熟慮のかなりの部分は、カントが僅か一卷の著即ち『純粹理性批判』において取り組んだ事柄とほぼ同じ主題に奉げられているのである。勿論、両者が同じく超越論的哲学をとると言っても、認識の客観的妥当性の根拠を何処に見出すかという点では大きく異なっている。ただ少なくともカントの簡潔な、問題設定の仕方だけはフッサール解釈の為にも見直してみるに価するように思われる。またフッサールの時間論の難解さは、彼の用いる術語の錯雑さにも一因があるように思われる。彼は「時間」という言葉に、「前経験的」「前内在的」「主観的」「内在的」「客観的」「宇宙的」「現象的」「現象学的」等々様々の修飾語を付けて用いており、またそれ等の幾つかは多義的なのである。更に「……時間」の後に「性」「意識」等の名詞を付加して用いることも多い。これ等の用語のすべてとはいかないが、大半をわれわれは然るべく整理してみたいと思う。さてフッサールは『時間講義』⁽³⁾を「時間意識の分析は記述的心理学と認識論との古来からの十字架である。ここに

横たわる途方もない困難さを深く感受し、殆んど絶望に到る迄この点に辛苦した最初の人はアウグステイヌスであった」(X, 3)という述懐で始めており、更に続けて、時間論においてははまだアウグステイヌスを越えた者はいないと迄言っている。フッサールの時間論がどのようなものになるかは、ここからして既におよその見当がつくであろう。しかしアウグステイヌスが時間測定の仕事から分析を始めていき、その結果として時間を(時間)意識として定立することになったのであるのに対し、フッサールは始めから時間(意識)の記述から出発する。現象学的還元という術語が用いられたのは一九〇七年であるから、これ以前の論述である『時間講義』の本論ではこの用語は勿論まだ現われていないが、⁽⁵⁾ここでも既に、主題に素朴に没頭するのではなく、事柄の与えられる仕方をまず第一に見ていこうとする態度がとられている。即ち客観的時間と呼ばれるものがどの様なものであれ、さしあたりはこれを素朴に前提して論を進めるのではなく、それを「排去(Ausschaltung)」して、そもそも時間はこの様に意識されるかということの記述から始めるのである。

ところでデーマーはフッサールの時間論の展開を、自我論の展開との結び付きの面からみて、三段階に分けてい⁽⁶⁾る。まず、自我を体験の空虚な同一極としてしか考えず、従って自我を無時間的であると考えている時期。次に、受動的綜合の分析を通じて、自我に時間的構造が帰せられる時期。最後に、一九三〇年代になって大きな転回があり、時間⁽⁷⁾が自我の能動的働きから生じるとされる時期。自我論との相即で展開を考えるという仕方には批判もあるが、三区分がなされ得るということだけは大方の認めるであろう。この時期区分を時間論そのものに即して言えば次のようになる。第一に、主として内的時間意識の構造を主題とする『時間講義』『イデー、第一巻』の頃、第二に、経験界における客観的時間の構成を重点的に論じる『経験と判断』の頃、第三に、時間と自我との関連を考究する、

C草稿群、『危機』書の頃。なおフツサールは既に『時間講義』において時間分析の三つの主題を挙げてゐる、即ち①客観的時間における経験の事物、②前経験的時間(d. präempirische Zeit)における内在的統一、③絶対的時間構成的意識流、とである(X, 13)。従つて第一期は②の主題を、第二期、第三期は各々①③の主題を重点的に考えていると言えるのであるが、萌芽的には既に『時間講義』のなかにその後の展開が見定められてゐるとも言えるであろう。⁽⁹⁾本稿ではこの②、①、③の主題に対して各々第二章、第三章、第四章が割り当てられている。

二、前経験的時間

(1) 準時間的秩序

『時間講義』は主として知覚を手懸りに時間分析を行う。「持続の知覚はそれ自身知覚の持続を前提としている」(X, 22)のだから、知覚されたものの時間形態に先立つて、知覚自身の時間的であり方がまず問われなければならない。そこで取り出された概念のうち最も重要で特異な概念は「過去把持(Retention)」(「第一次記憶 primäre Erinnerung」)である。いまあるメロディーを聞いているとしよう。メロディーがメロディーとして成立する為には以前の諸々の音が今の瞬間にもある種の記憶として残存していなければならない。しかも、同時的な和音としてではなく、他ならぬ継起的なメロディーとして聞いている限りは、それ等は生の音としてではなく、今においては既に無き音として、変様された形で今保持されているのである。今からみて以前の音であればある程生々しさは失われていく。それ等はなるほど今の生き生きとした構成ではないという意味で「死せるもの」であるが、今の構成にまだ射映しているという意味では「今の生き生きとした地平」(X, 43)をなしている。これが過去把持である。このことはメロディーについてだけでなく、一つの音についても妥当する。「音は始まり、それから終る、そして、音が始ま

り且つ終る持統統一全体、経過全体の統一は終つた後絶えずより遠い過去へと「移る」、この沈降において私は音を
 なお「保持しており」、それを過去把持において持つている。そして過去把持が存続する限り、音はそれ自身の時間
 性を持つており、音は同じ音であり続け、音の持統は同じものであり続ける」(X, 24)。しかし過去把持によつて
 保持されているものは「言はば死せるものとして、もはや生き生きと産出するものではないものとして、今という産
 出点によつては生かされていない形成体として現存しているが、この形成体は常に変様し沈下して「空虚なもの」と
 なつていく」(X, 24 & 360)。今聞かれた音は次の今には過去把持の位置に沈下し、更に次の今には過去把持の過去
 把持となつていく。こうして「過去把持の連続体」(X, 29)が生じる。今の把握(統覚)を核とすれば、これに「過
 去把持という慧星の尾」(X, 30)、または「記憶―尾」(X, 280)が連続的に繋がつている。過去とは、今、過去
 把持されている、今の地平である。「各々の過去把持はそれ自身において、射映系列という仕方による言はば過去の
 遺産を担っている連続的変様である」(X, 281)。もしそうではなくて過去が今とは全く疎遠な、不連続的なもの
 であるなら、われわれは過去について何等の言表もできないであらう。もともと今無いものを過去と呼ぶのだから、
 この無いものが何等かの仕方で有るものとされ得ない限り、即ち今と過去との何等かの連続性が前提されな
 ない限り、
 単なる点的今しかないことになってしまう。勿論そうは言つても、過去把持の連続体は死体^{シニヤ}としてはどこまでも続い
 ているであろうが、今生き生きと取り押さえられている遺産には限界がある¹⁰。今、ある音を聞いた時点で、コンサー
 トの始まり以来の音をすべて生き生きと保持しているとは限らない。どこが限界であるかは明確には指定され得ず、
 限界自体も流動的であるが、それはその時々々の関心によつて左右される。とにかく、過去は顕在的には今ではないが、
 潜在的には今であるという二面性、即ち過去と今とがある意味では継起でありながら、ある意味では同時であるとい

う二面性を表わす為にフッサルは「流動的な先一共時 (fluxionales Vor-Zugleich)」 という表現を用いる。これは三つの音を和音として同時に聞くような場合の「流動的なものの印象的共時 (impressionales Zugleich)」 (X, 78) とは区別される。過去把持の特性を明確にする為には「再想起 (Wiedererinnerung)」⁽¹⁾ または「第一次記憶」との差異の面からみるのがわかりやすい。過去のあることを想い出すということは今の顕在的な作用であり、潜在的な過去把持の連続体のうちの一部を切り取り今顕在的に再生することである。知覚が過去把持の連続体のうちで何等かの持続的対象性 (今聞いているメロディー) を構成するように、再想起も同じく過去把持の連続体のうちで何等かの持続的対象性 (昔聞いたメロディー) を再構成する。前者は現在における構成であるという意味で「現在化 (Gegenwärtigung)」と呼ばれ、後者は現在における〈再〉構成であるという意味で「現前化 (Vergegenwärtigung)」と呼ばれる。この現前化に対して、「過去把持はいかなる持続対象性をも (原的にであれ再生的にであれ) 産出せず、産出されたものを意識のうちで保持するに過ぎず、これに「たった今過ぎ去った」という性格を刻印するのである」(X, 36f.)。再想起は自我が自由に行い得る作用であるのに対して、過去把持は、現前化であれ現在化であれ、今の作用に全く受動的に伴ってくるものである。

過去把持と並んで、あるいはこれと対照的に「未来把持 (Proletion)」(「第一次予期 primäre Erwartung)」というものがある。あるメロディーを聞いているとしよう。ある音を聞く今には、既に来たるべきものに対する予期がひそかに働いているのである。特定の音ではなくても、少なくともこの後まだメロディーの続きがあるかないかぐらいのことは予期されている。「いかなる根源的に構成的な過程も、来たるべきものを空虚に構成し且つ捉え、充実にもたらす未来把持によって生かされている」(X, 52)。未来把持は明確な期待といったようなものではない。そ

れは今の潜在的地平をなしており、今に受動的必然的に伴っているものである。実際日常生活においても瞬間毎全き暗闇のなかで手探りしているというわけでもない。未来とは、まだ無いものごとをいうのであるから、顕在的な今と異なるということは言うまでもないが、だからと言って、今との何等の連続性も無いとすれば、未来という言葉を使うことすらできないであろう。勿論未来把持の連続体においても、今の関心に応じて限界が設定できるであろうが、この限界は明確なものではなく、流動的であるということは過去把持の場合と同様である。未来把持は今の潜在的な地平に過ぎないのだから、顕在的な今の期待、即ち一種の現前化である「先想起 (Vorerinnerung)」とは区別されなければならぬ。後者は前者の連続体の一部を切り取り、明らかなイメージを描いてみる自発的作用である。ある目的を積極的に定立する企投 (Entwurf) 等もこれに属する。再想起が〈再〉構成であるということと類比的に、先想起は〈先〉構成とでも呼ばれてよいかもしれない。¹²⁾ところで、未来把持が過去把持と決定的に異なることは、後者が既に充実されている (知覚されている) のに對して、前者は充実されることもあれば充実されない (予期に反する) 場合もあるという点である。前者がこのように不確定なものであるということは、人間学的分析においては重要な意味を持っているが、ここではさしあたりは考慮に入れなくてもよいであろう。

このような、今が地平を伴うという観方即ち過去も未来もある意味で現在に還元されるという観方はもともとアウグスティヌスのものである。だからアイグラの言うようにフッサールを「現代的解釈のアウグスティヌス主義」¹³⁾と評することもできる。アウグスティヌスによれば、過去はもはや存在しないのであるから、それが存在するとすれば意識のなかの痕跡として即ち現在における記憶としてでしかあり得ないし、また未来はまだ存在しないのであるから、それがあるとすれば現在における何等かのしるしとしてでしかあり得ない。「しかしいまや明々白々なことは、未来

のものも過去のものも存在しないということであつて、本来の意味で過去未来現在の三つの時間が存在するとは言われない。むしろおそらく本来の意味で言えるのは、過去の現在、現在の現在、未来の現在の三つの時間が存在するということである。じつさい、この三つのものがなんらかの仕方で魂のうちに存在するのであろう。そして魂より他の場所にはそれらを見ないのである。過去の現在は記憶であり、現在の現在は直視であり、未来の現在は期待である¹⁴。アウグスティヌスの言う記憶 (*memoria*) 直視 (*contuitio*) 期待 (*expectatio*) には夫々フツサールの言う過去把持、今、未来把持が当て嵌められ得る。ところでアウグスティヌスがすべての時間様態を現在に還元して、現在に巾を持たせようとしたのは、時間を計測する尺度 (単位) を求めていつて、成功しなかつたからであつた。彼は次のように推論した¹⁵。かりに現在という巾を百年とする。しかしこれは更に一年、一ヶ月、一日、一時間というように細分化され得る。もしそれ以上細分され得ないような単位が見出されるなら、これこそ現在なのであるが、そのような細分化には切りがないので、結局最少の現在というものは無いことになる。そうすると時間を測る尺度は何も無いことになってしまうから彼は現在自体に巾を持たせたのである。これに対してフツサールは、現在を「大まかな今 (*das grobe Jetzt*)」と「も」と微細な今 (*ein feineres Jetzt*)」とに分ける (X, 40)。前者は地平としての把持をも一契機として含む広い意味を持つ。他方後者に該当するのは「原意識 (*Urbewusstsein*)」または「今把握 (*Jetztauf-fassung*)」と呼ばれるものである。この「微細な今」もアウグスティヌスが発見しようとしたものではない。時間そのものが可分割なものだとすれば、ゼノンのパラドックスと同じような事態に陥つてしまう。実際はアウグスティヌスの「時間」も、ゼノンの「運動」も、物質 (剛体) とは違って可分割性を含意していないものである。フツサールの言う「微細な今」は「ある理念的限界、何か抽象的なものに過ぎず、それだけでは何ものでもない」 (X, 40)

のである。従つてこれはむしろアリストテレスの言う「ある意味において、〈点〉に準じている」⁽¹⁶⁾今である。点は線分を区分すると同時に連続的にする。点は一方の終りを示し、他方の始まりを示す。点が位置だけあつて大きさのないものであるのと同じく、「微細な今」も「理念的限界」を示すだけであつて、大きさのない「抽象的なもの」である。「顕在的今は必然的に点的なもの、常に新しき質料に対する滞留的形式であり、またそうであり続ける」(III, 199)。アウグステイヌスのように、時間が可分割であるということのみを前提として、そこから単位となる今を求めていくのではない。時間が測定できるのは、却つて今が一定の単位となり得るということのみを前提としているのである。点はそれ自体では大きさを持たない抽象的なものであるが、われわれは具体的な場面では適当な大きさで書くことができるのと同様に、今という単位の大きさは自由に設定できるであろう。今は漠然と現代でもよいし、この一日でもよいし、マイクロセカンドでもよい。但しアリストテレスも注意しているように、点と今との類似はここ迄である。点は相対的には静止しているとみてもよいが、今は移り変わる。そして今の移行こそは時間論が本来問題とすべき事柄であるが、さしあたりはそこ迄立入らなくてもよい。重要なことはこの今こそが時間の起点であり、原意識であるということである。把持はこの変様として絶えず産出され続けていく。「私は経過した位相を把えながら、現在の位相を生き抜き、それを——過去把持のおかげで——「付け」加え、(未来把持によつて)来たるべきものに向つている」(X, 118)。フッサールにとつて過去、現在、未来(正確に言えば、過去把持の連続体、微細な今、未来把持の連続体)という分枝は、以前(Vorher)、今、以後(Nachher)(正確に言えば、以前の連続体、微細な今、以後の連続体)という分枝と全く同じことを意味している。もつと厳密に言えば、前者の分枝は今における、把持の〈結合〉の側面を、後者の分枝は今における前後の〈分節〉の側面を強調した表現であろう。結局のところ、意識は三分節的結

合構造¹⁸⁾を持った「粗大な今」の移行だということがわかった。逆にみれば、この意識の流れから形式的側面だけを抽象すれば、時間意識の三分節的結合構造が析出されるのである。客観的なものを還元して時間意識に帰ってきたこの段階では「そこでは、今、以前及び以後と言われ得るだけである」(X, 339)。この構造が「前経験的時間」「前経験的、あるいは現象学的時間」(X, 124)、「準時間的秩序」(X, 82, 380 usw.)等と呼ばれるのである。「前」「準」という接頭語が付けられているのは、本来の経験と呼び得るものの形式的構造を抽出しただけに過ぎないからである。実際いま迄のこの抽象も、メロデーを聞いている場合のように具体的経験に即して行われたのであった。だから形式と言っても、箱の中に物があるように、時間という枠組の中に現象があるのでなく、現象が主観に対して現象する場合の必然的形式が準時間秩序なのである。そして対象的なものが意識作用を通じて前経験的時間によって限定されるところに始めて経験が成り立つ。この限定をフッサールは「時間化 (Zeitigung)」と名付け、カントは「時間限定 (Zeitbestimmung)」と呼ぶ。しかし前者にとつては準時間的秩序と時間化とは後者におけるよりもいっそう相即不離である。カントも「われわれのすべての認識は究極的にはやはり内感の形式的制約即ち時間という形式的制約の下にあり、総じて時間において秩序づけられ、結合され、関係づけられなければならない¹⁹⁾」と言うが、ややもするとこの制約を入れ物と考えがちであった。後述するように、彼は時間を、現象(または空間)に対して独立変数であると考え、傾向が強いのである。彼が時間意識の三分節的結合構造に殆んど関心を持たないのもこの傾向の一つの現われであろう。勿論彼にとつても、現象が現象し得る為には必ず内感を通過しなければならないという意味で、内感の形式が同時に現象の形式であり得るのだが、しかし現象がなくても時間はある。他方フッサールにとつては、時間は常に同時に現象で満たされているからこそ、〈現象〉学が成立し得るのである。彼にとつて内感の形式は

現象の爲の予めの枠組みではなく、現象が現象する場合の、この現象する形式が同時に内感の形式としての準時間的秩序なのである。言はば準時間的秩序へと時間化があるのではなく、時間化の形式的側面が準時間的秩序なのである。両者にはこのような相違があるけれども、時間が少なくとも内感の形式であるという意味では共通点がある。もし時間が形式以上のもの即ち何か実質的なものとすれば、この実質は何であり得るだろうか。時間は物的なものに伴うものであるにしても、それが剛体や量子そのものであるとは誰しも考えないであろう。逆に物的なものこそ時間限定されるべき当の物だからである。では時間は何か能産的な力を持っているようなものであるだろうか。神話にはこのような考え方もないわけではないが、事實はわれわれはこのような例を一つも知らないのである。次に、時間は本来客体的なものではなく、ベルクソンの場合のように生（または意識）の本質だとすればどうであろうか。彼は純粹持続という真の時間と空間化された等質的時間とを区別する。いま時計の針の動きを見てみるとすれば、どの瞬間にも針はある一つの位置にしかないのに、それを見ている「私の内部では、意識の諸事象の有機化と相互浸透の過程が行われるのであり、これが真の持続をなす⁽²⁰⁾」。そしてこの真の持続を私の外に投影して、空間にも持続があるかの如く錯覚するところに「諸瞬間が空間に配列されるような等質的時間」が成り立つ。われわれにも「意識の諸事象」の即ち記憶と知覚との「相互浸透」ということ、意識が異質性の持続だということは十分理解できるが、しかし真の時間が「相互浸透」したり、異質なものの連続であつたりするとは考えにくい。もし字義通り過去という〈時間〉と現在という〈時間〉とが相互浸透したりするとなれば、過去と現在の区別など全く不可能であり、従つてこのような内的なものもが投影された等質的時間についても過去と現在の区別はできるはずがないから、幻影的な量化（等質化）すらできないであろう。だから勿論一切の計測は不可能となる。真の持続は意識の本質ではあつても、時間そのものと

は言えないであろう。ベルクソンは時間を何か実体的なものと考えているのではあるまいか。²² 確にベルクソンが批判するように、カントは時間を極めて等質的なもの（量）と考えているし、またややもすると現象の入れ物のように考える傾向があるのだが、後述するように、その欠陥は空間化された時間という考えから発するのではなく、空間を超えた時間すら考えているからである。ところで、以上のように時間を実質的なものとは考えず、形式だとする立場のなかでも、カントやフッサールのように感性の形式だとせず、客観的存在者の形式だとする見解もあるだろう。時間が客観そのものに属するという考え方は、時間が二つの慣性系の速度差に応じて相対的に伸縮するという特殊相対性理論の登場以来、ある意味では強化されたようにみえる。この「ある意味」についてはこの場所では触れないが、いまは、時間を感性の形式とする立場の者でも、時間が事物と無関係なものだと言っているのではないということだけに留意しておこう。単に断言されただけの客観的實在性即ち物自体の形式でないことは言うまでもない。だからその限りではカントも「時間の経験的實在性即ち客観的妥当性」²³を主張し得るのである。²⁴

さてこのように、準時間的秩序としての時間は以前、今、以後という分節を持つ、あるいは今における、過去と未来の結合を伴う、感性の形式であるということになった。「体験一般にとって時間性というタイトルが表現している本質特性は体験と体験とを結合する必然的形式である」(III, 198)。ここで、私における時間の以前と以後との分節が私以外の他の観測者にとってもそうであるか否かを当面問題としないなら、私にとっての時間は当然、以前から以後への一方向的なものである。以前、以後という言葉自体が既にこのことを示している。従って、時間が直線的であるか円環的であるかというような問題は単なる擬似問題となる(直線的であったり円環的であったりするのは時間ではなく、時間形式に捉えられた即ち時間化された現象の性質に属することである)。時間が可逆的であるか否かとい

う問いはいつそう擬似問題の色彩が濃い。

ところで時間を純粹に形式に過ぎないということにすると、こんどはフッサールの文章の整合的理解に多少苦しむことになる。彼は「時間は動かない、それでも時間はやはり流れる」(X, 64)⁽²⁵⁾と言う。時間が形式であるとすれば、この形式が流れるというようなことは、四角は赤いというのと同じ程無意味であろう。しかし意識は「永遠のヘラクレイトスの流れ」(X, 349)であるとすれば、「準時間的秩序」自体は不変であるが、この三分節的結合構造がそっくりそのまま絶えず移行していくわけであり、この意味ではフッサールの命題もなかなか巧妙であると言えよう。正確に言えば、流れるのは形式としての時間ではなく、時間を発現せしめる意識と、これにおいて告知される現象とである。比喩的になら、この後二者の流れを時間が流れると言ってもさしつかえないし、まさしく日常的用語法はそうである。これよりも、もっと困った問題は、フッサールが「時間意識」と「時間そのもの即ち具体的に充実せられた現象学的時間」とを区別しており(III, 292)、また「時間意識と時間そのものとの区別は、内時間的(innerzeitlich)体験またはこの体験の時間形式と、これに対応する多様性としてのその時間的現象仕方との区別としても表記され得る」(I, 81)と述べている点である。つまりわれわれが「時間」を専ら、形式としての時間という意味で考えようとしているのに対し、フッサールの「時間そのもの」という表現は、いかにも時間が「そのもの」として自立的に成立しているかの如きニュアンスを伴っている。もしそうなら時間自身〈が〉自ら時間化することにもなりかねないが、実際には意識(構想力または悟性)〈が〉時間化の働きをするのであって、時間自身ではない。常軌的には、時間がそれ自身で流れているかの如く考えられがちであるし、またそれでも特に不都合が生じるというわけでないけれども、厳密にみれば「常軌的」「比喩的」にしかそうは言われ得ないのである。しかしいまはフッサール

解釈が問題なのだから、たとえ常識的言い方にしか過ぎないにせよ、彼自身の使い方をそのまま承知しておくべきかもしれない。但し「時間そのもの」と言ってもあくまで、どこかに端的に存在しているようなものが考えられてはならないということには十分留意しておこう。彼も、時間がそれ自身だけで何等かの作用力を持っているような能産的なもの、あるいは実体的なものとは考えていないからである。ある意味で能産的であり得るのは意識であつて、時間自体ではなく、「意識の流れがその時間を持つ、そしてこの流れにおいてすべてのものが時間的に秩序づけられるのである」(X, 296)。従つて時間は形式に過ぎないということにならざるを得ず、この意味で時間は受動性そのものである。例えば彼も過去把持は「純粹な受動性の枠内での指向的変様である」とか、未来把持を「純粹に受動的な予期」(EU, 122)とかという表現を使っている。「純粹な受動性」とは自我の特定の作用が加わらない、あるいは加え得ないということであろうから、従つて時間は形式としてしか考えられないのである。「あらゆる他の意識綜合を可能にする、普遍的綜合の根本形式は包括的な内的時間意識である。その相関者は内在的時間性そのものであり、この時間性に従つてこそ、自我の反省的に見出され得るすべての体験は、時間的に秩序づけられたものとして、時間的に始まり且つ終るものとして、同時的及び継起的なものとして——内在的時間の絶えざる無限の地平の内部において——示されるに違いない」(I, 81)。ここで挙げられている、時間の意識を示す「内的時間意識」(あるいは既に引用された「内時間的体験」)と、専ら意識の形式的側面を示す「内在的時間(性)」(「前経験的時間」等と同義)とはもともと異なつたものではなく、重点の置き方に違いがあるだけである。「根源的時間野」(X, 6)という術語もこの後者の系列に該当するであろう。⁽²⁸⁾

以上のようにフッサールはカントと共に、時間を感性の形式だと言い、これを通じて客観的なものが開示されると

考える。「いまやわれわれは時間が感性の形式であり、だからこそ、それは客観的経験の可能的世界の形式である、
 というカントの命題の内的真理を理解する」(EUL, 191)。ところがカントの方は時間論をいきなり五ヶ条からなる
 思弁的考察即ち「形而上学的究明」から始めている⁽²⁹⁾。その第一は、同時存在とか継起とかの知覚が可能になる為には、
 その前提として、時間という一般的表象がなければならぬということである。だから「時間ほどのようにか経験か
 ら抽象された経験的概念ではない」⁽³⁰⁾。確に時間はエンピリツシユな表象ではないにしても、時間を経験から抽象する
 以外にそれについての何等かの表象をわれわれは持ち得るであろうか。持ち得るとすればそれは全く空虚な時間の表
 象でしかあり得ない。この点は第二の究明で、もつと明らかにする。「なるほど現象を時間から簡単に取り除くこと
 ができるが、現象一般に関して時間そのものを取り去ることはできない⁽³¹⁾」と言われている。この文章の後半は了解で
 きるが、前半はどうであろうか。現象を時間から取り除いてみることはわれわれには容易にはできそうもない。でき
 るとすれば、それは全く空虚な時間の表象である。一切何も無いところで、目盛りのついた直線的な無限な物差し
 上を針だけが刻々と時を刻んでいくというような表象である。空虚な時間とは、現象を欠いた、現象を超えた、言は
 ばニュートンの絶対時間のようなものである。だからカントの究明はいささか「形而上学的」に過ぎるようである。
 そもそも同時存在とか継起とかについて言々し得るのも、時間意識の分節的結合構造(前―共時と印象的共時)に則
 ったであろう。この点は第三の究明においてさらに明らかにする。カントはそこで「時間は一次元だけを有する、即
 ち異なつた時間は同時的ではなく、継起的である」⁽³²⁾と言う。この一文の「即ち」以下は同語反復であり、問題外とす
 れば、「一次元だけを有する」ということが問題となる。何故そう言い得るのかを彼は全く説明していない。「一次
 元」とされ得るのは、実際は時間意識がもともと「以前」「今」「以後」という分節を持つていることから由来して

いるのである。第四には、異なつた時間は同一の時間の部分に過ぎないから、部分を自分の下に包摂する「概念」ではないと言われる。「時間は比量的概念……あるいは一般的概念ではなくて、感性的直観の純粹形式である」³³。この命題には特に問題はないであろう。最後の究明は、「時間の無限性とは、時間のあらゆる限定された量はその根底にある唯一の時間の制限によつてのみ可能である、ということ以上のことを意味しない。だから時間という根源的表象は無制限なものとして与えられていなければならない」³⁴ということである。即ち時間は無制限なもの、直観によつて表象されるものである。なるほど無制限な量が完結した無限性とか無制限性を意味しないにしても、量が無制限である限りは直観によつて表象され得ると思われぬ³⁵。フッサールの言うように「無限な時間の表象は、無限数列や無限な空間と全く同様、概念的表象作用による形成体である」(X, 14)のではなからうか。おそらくカントなここでもニュートンの絶対時間のようなものを想定しているのであろう。彼も、直観における、時間の無限性が悟性によつて具体的に限定される場面を説明するに際しては、無限な量を積極的には主張しなかつた。「原則論」の「直観の公理」では、「すべての直観は外延量である」³⁶と言われており、この外延量は、部分の加算によつて全体表象が得られるような、継時的総合による量とされている。従つてここでは無制限な全体は「概念的」表象作用による極限「概念」としか考えられない。フッサールも折々「無限な」という言葉をさりげなく用いているが、やはりすべて極限概念としてであろう。このように考えてくると、時間論の出発点としては、地味に時間意識の構造分析からとりかかる方が適切であるように思われる。

(2) 時間化

予めフッサール哲学の根本概念である「指向性」について必要な範囲で素描しておきたい。これは、意識が常に何

ものかについての意識である、ということである。これは一般的にはへノエシス（作用的側面）―ノエマ（対象的側面）―構造で示されるが、正確に言えば（自我―ノエシス―ヒュレ（感覚）―ノエマー対象）という分節を持っている。〈自我―ノエシス〉関係は最終章の主題として残しておく、まず（ノエマー対象）構造からみてみよう。ノエシスが絶えず変異するのに対応して、目指されているノエマも常に変化する。移り変わるノエマの多様性のなかで、同一的なものが形成される時、それがノエマの核であり、〈意味〉と名付けられる。例えば私がいま何かあるものを見ているとすれば、時々刻々変化するノエシス、ノエマを通じて、「机」「木製」「四角い」等の意味が形成されていく。そして何かあるもの即ち対象はこれ等諸々の意味を通じて規定されていくのである。対象は諸々の意味を伴う同一極としてのDas X（カントの用語では、超越論的対象ⅡX）である。（ノエマー対象）関係はノエマ的指向性と呼ばれる。ところでこの指向性もノエシスによって規定されているのだから、本来の意味での指向性はノエシスの指向性である。そこで次に（ノエシス―ヒュレ―ノエマ）構造をみていこう。ノエシス（把握作用、統覚作用）は与えられたヒュレの多様を綜合、統一してノエマを構成する。構成はヒュレを媒介として意味を形成するのだから、意味付与とも呼ばれる。フッサールは、カントのように純粹性概念としての範疇を予めの主観の形式として立てるのではないから、後者と同じく構成という言葉を使っても（カントはKonstruktion, フッサールはKonstitutionを用いる）、その意味するところは大きく異なっている。ノエシスは直観の多様を悟性の先天的形式の下へ包摂するのではない。事象が与えられるということと、どの様にかノエシスが働いているということが同義なのである。「一つの同一的事物が現出するが、この事物性はあらゆる位相において絶えず射映の多様性のうちで自己自身を呈示する(Darstellen)」。事物はそれ自身諸現出の流れにおいて構成され、この諸現出自身は根源的印象の流れにおける内在的統一として構成

されている」(X, 88)と述べられているように、事物が自己自身を呈示することが同時に、ノエシスによって構成されることなのである。結局両者の違いは、カントが普遍妥当的認識を先天的綜合判断によるのに対して、フツサルが本質直観(言はば先天的綜合直観)によるとすることに由っている。後者においては、本質は本質(直観)された限りで本質と言われ得るのではあるが、事柄の本質性は主観の側にあるのではなく事柄そのもののうちにあり、あくまで(本質)直観に由るのである。だからフツサルは、悟性の下への包摂ということを強調する『純粹理性批判』、B版よりも、構想力の独自性を認める傾向にあるA版の方を高く評価している(zB. XI, 125, 275 usw.)

さて既に見てきたように、前経験的時間を下描きとして具体的に時間化が行われるのであった。いまさしあたりはカントが超越論的演繹と呼ぶところの事柄が問題となる。その場合「受動的綜合」という概念が重要な意味を持っている。フツサルは始めはヒュレを単なる無記的な感覚与件と見なす傾向が強かったが一九一〇年代後半から、それが受動的綜合によって与えられると考えるようになった。自発的な作用に先立つて「既に予め受動的に「感性的」統一が構成されている」(EUJ, 210)のである。受動的綜合はA版の演繹で言えば、いちおう「直観における覚知の綜合」と「構想における再生の綜合」⁽³⁷⁾とがこれに当たるのであろう。フツサルは「感性的統一」がカントの場合と同じく意味の親近性による連合(Assoziation)によると考えているからである。しかし厳密にみれば、さつき見ていたものを今まだ取り押さえておくという、やや短期的、やや能動的な「再生の綜合」に比せられるフツサルの術語は「まだ掴まえて保持しておくこと(Das Noeh-in-Griff-behalten)」である。これに対して受動的綜合は、今覚知しているものが、昔これと類似したもの、または対照的なものを見たことがあるという深層の記憶と(受動的に)連合される綜合である。このようにフツサルの方がより深層意識を考えているという点を留意しておくなら、いちおうは両

者の比較も意味があるだろう。さて「連合の現象学は言はば根源的な時間構成論の高度の継続である。」(XI, 118)、「時間意識はある普遍的形式を立てる意識に過ぎない。……事実上の喚起と、知覚や記憶の事實的直観的結合、または知覚や記憶の指向的対象の事實的直観的結合とは連合の働きである、即ち時間意識という最下段の綜合の上の層にある、受動的綜合という仕方の働きである」(EJL, 207)。受動的綜合は受動性そのものである時間形式を下絵にしている。逆に、後者はまず受動的綜合において発現すると言つてよいかもしれない。今におけるノエシスの多少とも自発的な働きに対して制約となるのが受動的綜合であるが、この綜合には、今の〈受動的〉制約となるという面では過去把持という時間性格が、また受動的ではあつても、今における〈綜合〉即ち今の覚知と結び付く綜合であるという面では現在性という時間性格が付せられてもよいように思われる。では未来把持は何に付せられるべきであろうか。この問題の為にハイデッガーのカント解釈を参考に見よう。周知のように彼も構想力の働きを重視するから、A版を高く評価している。そして彼はカントの三段の綜合の時間性格を次のように解する。まず「純粹覚知としての純粹綜合」においては、心性は諸々の〈今〉における各々の印象を通覧するのだから「覚知としての純粹綜合は「現在一般」を呈示するものとして時間形成的である」⁽³⁸⁾。次に「純粹再生としての純粹綜合」においては、再生作用は、より以前のものを視野にもたらすのだから「再生の様態における純粹綜合は既在性 (Gewesenheit) そのものを形成する」⁽³⁹⁾。最後の「純粹再認としての純粹綜合」については、〈再〉認という語感から発するわれわれの常識を破り、しかもカント自身が悟性(統覚)の時間性を拒否しているにもかかわらず、そこに「将来 (Zukunft)」という時間性を彼は見出す。前の二つの綜合はそれ自体としては統一されるべき必然性はないにもかかわらず、自同的なもの (Selbstiges) に関係しているとして統一され得る為には、この二つの綜合の前提として、存在者を合一する綜合が〈予め〉

なければならぬ。この予めの綜合こそが「予め自同的なものとして前以つて保持されていなければならぬものを予め探索し、「探り抜く」のである」⁽⁴⁰⁾。カントは一見時間に背を向けているようだが、實際は予料的なこの綜合こそが「時間は根本的には将来から時熟する(zeitigen)」という、時間の最も根源的な本質」⁽⁴¹⁾を顕わにするのである。ハイデッガーのこのような巧妙な議論に誘われて、われわれもフッサールの場合に帰つてみよう。彼は「概念における再認の綜合」に当たるものを「再想起」と考えているようである。「知覚において且つ知覚においてだけ構成された一者……はまだいかなる「対象」でもない……。「対象」とは認識の相関者であり、認識は根源的には綜合的同一化のうちにある、再想起を前提としている」(K, 327)と言われている。いささか強引であるが、この「前提としている」側面、「予め探索し、探り抜く」側面をわれわれは予期と考えてもよいであろう。この同一化の基体は概念と呼ばれてもさしつかえないであろうが、カントのいう範疇ではないことは言うまでもない。それは既に習得されている本質認識であり、これに則つて予期が働くと言えるのである。従つて一見再想起は「以前」に向うイメージが強いが、これが機能する地平として「予め」の未来把持が考えられなくもないのである。

以上の分析は、認識の時間構造を確めただけである。カントが演繹論に続いて、具体的に經驗判断を形成する為の「超越論的時間限定」を求めて図式論を立てたように、フッサールも時間化の問題を考究していく。「時間化とは、存在者の、時間様態における構成である」(C 17 III, S. 6)⁽⁴²⁾「存在者の各種各段階のすべての構成は時間化であり、この時間化は存在者の各々固有の意味に対して、構成的体系のなかでその時間形式を与える……」(W, 172)。簡単に言えば、時間化とは存在者を準時間的秩序において捉えることである。時間化には、現象が与えられたままに分節して摺えられる、知覚の秩序と、われわれに对象的なものの本質認識(カントの先天的綜合判断)が可能な限りでの、

事柄の本質に属する秩序（例えば因果律に従う秩序）とが考えられる⁽⁴³⁾。前者が「現象的時間」であり、後者が「客観的時間」である。しかしフッサール自身は「客観的時間」を多義的に用いている。構成は時間化であると共に、客観を客観として立てる作用でもある限り、即ち一般に「時間意識は従って客観化する意識である」(X, 297) 限り、知覚されたものも本質も共にもとも客観的なものである⁽⁴⁴⁾。だから現象的時間も客観的時間の一種であるとも言える（『時間講義』ではまだ本来の客観的時間と十分区別がつけられていない）。更にフッサールは「相互主観的に共通の客観的時間」をも考えている。本稿では混乱を避ける為に「現象的時間」「客観的時間」とを分け、またもう一つの客観的時間を「相互主観的時間」と略称することにする⁽⁴⁵⁾。具体的な時間化の問題は次章の課題とする。（未完）

注

- (1) フッサールの著作からの引用は、ローマ数字で全集の巻号を、アラビア数字で頁付けを、各々本文中に示す。なお *Er-fahrung und Urteil*, hrsg. v. L. Landgrebe, 3. Aufl., Classen, 1964 からの引用は「E」と略記する。
- (2) vgl. R. Boehm, Einleitung des Herausgebers, S. XXXI, in Hua. Bd. X
- (3) 一九〇四年から一九〇五年にかけての冬学期に時間論の講義がなされたのであるが、一九二八年、ハイデッガー編集といふ名目で *Jahrbuch für Philosophie und phänomenologische Forschung*, Bd. IX に発表されたものについては、この講義から採られた部分はいく少少数で、大部分は一九〇七年〜一九〇一年迄の原稿が中心であり、一九一七年のものもある。vgl. R. Boehm, *ibid.*, S. XXIII. なお現在の全集第十巻には一八九三年〜一九一一年の論考が補遺として取められている。
- (4) 現象学的還元という方法的な操作が整理されたのは一九〇六年から一九〇七年にかけての冬学期においてである。vgl. W. Biemel, Einleitung des Herausgebers, S. VIII, in Hua. Bd. II, 及び U. Claesges, Einleitung des Herausgebers, S. XIV, in Hua. Bd. XVI
- (5) 全集第十巻の附論では本論が講じられて以降のものも収められているので、この術語も使われている。z. B. S. 124, S.

338f.

- (9) A. Diemer, *Edmund Husserl*, 2. Aufl. A. Hain, 1965, S. 116ff.
- (7) フッサールにとってはもともと自我の確立こそ問題だったのだから、最後期になって始めて自我の能動的働きが出てくるのではないという理由で、ヘルトはハイマーの見解に異を唱えている。K. Held, *Lebendige Gegenwart*, M. Nijhoff, S. 99
- (8) 別の箇所では (X, 287)、「この順序を逆にして①意識の流れ ②前経験的時間 ③経験の存在とに分けている。
- (9) ヘルトは『時間講義』の第三十四節以降がその後展開されたとしている。K. Held, *ibid.*, S. 11
- (10) この限界内の時間を「現在時 (Präsenzzeit)」と呼んでもよい。シュテルン (W. Stern) の『心理的現在時』への参照を求めている箇所もある (X, 220)。
- (11) 想起に「再」を付加するのは余計なようであるが、後に出てくる「先想起」と区別する為に、敢えて付加しておく。
- (12) フッサールは「再生産的先想起 (reproduzierende V.)」(III, 178) という用語も使っているが、混乱を避ける為には re- に代えて vor-とした方がよいであろう。
- (13) G. Eglar, *Metaphysische Voraussetzungen in Husserls Zeitanalyse*, A. Hain, 1961, S. 103. 彼はフッサールがアウグスティヌスのテキストを一言一句知っていたとも言っている (*ibid.*, S. 47)。
- (14) Augustinus, *Confessiones*, XI, 20. 今泉二郎、村治能就訳『告白』河出書房、世界の大思想 3、三〇七頁。
- (15) Augustinus, *ibid.*, XI, 15
- (16) 奇妙なことにフッサールはアリストテレスに言及することは全くない。全集第十巻においてアリストテレスに触れているのは僅か一ヶ所 (X, 245) だけであり、しかも時間論と直接関わりのない部分である。
- (17) Aristoteles, *Physica*, 220a. 藤沢令夫訳『アリストテレスの自然学』中央公論社、世界の名著 9、一一二頁。
- (18) 時間構造の二分肢説を唱える珍しい見解もある。シュミッツによれば、純粹な今は、夜中に突然驚いて目が覚める時とか、不意に痛みを感じる瞬間とかであり、この「不意なること (das Plötzliche)」によって今は否応なく来たるべき無気味なものに曝される。これに対して過去はこの不意なる際にはいったん現在と切り離されてしまう。だから彼は現在と未来と

を合わせて「擬似現在(Appräsenz)」と呼び、これと過去との二分肢を主張し、「時間の、伝統的な三分肢」説に代えてくる(H. Schmitz, *Subjektivität*, H. Bouvier, 1968, S. 73~S. 79)。これは面白い見解であるが、無理に二分肢にする必要は感ぜられぬ。

(19) I. Kant, *Kritik der reinen Vernunft*, A99

(20) H. Bergson, *Essai sur les données immédiates de la conscience*, 154^e ed., P. U. F. p. 80

(21) H. Bergson, *ibid.*, p. 178

(22) わが国のフッサール時間論の研究の草分け 高橋里美も、フッサールの時間論は「形式なる点において、或る意味で実体的なベルグソンの純粹持続と区別せられるであろう」と言っている。高橋里美全集、第四卷、福村出版、一九七三年、一〇五頁。

(23) I. Kant, *ibid.*, A35=B52

(24) ハイデッガーは「カントにおける「実在性(Realität)」という概念を、今日の認識論という現実性(Wirklichkeit)と取り違えてはいけぬ」という注意をしており、それは事象性または本質のことを意味すると言っている(M. Heidegger, *Kant und das Problem der Metaphysik*, V. Klostermann, 1951, S. 84)。

(25) カントも「従って時間は……常性的であり変異しなく」(A182=B225f.)と言っており、また他面「時間は……常に流れる」(B291)とも言う。

(26) この「時間的」はtemporalであるが、フッサールは大抵はzeitlichを用いている。彼はハイデッガーとは違って、この二つを区別していなう。

(27) ある箇所では「内在的時間即ち持続するものの持続と変化とがそのうちにある客観的時間、真の時間」と「準時間的秩序」としての「前現象的、前内在的時間性」とを区別する(X, 83)。この「内在的」と「前内在的」という言い方は誤りであろう。

(28) また「主観的時間」(X, 112, EU, 183 usw.)「現象学的時間(性)」(X, 22, III, 196 usw.)という術語は『時間講義』では「前経験的時間」を示しているようであるが、その他の著では主に本来の「客観的時間」との対比で述べられており、従って「現象的時間」(EU, 190 usw.)を指しているようである。

- (29) だからシュミッツは、アウグスティヌスに較べてカントには全く躊躇というものがなく、彼は当然の事実であるかの如く奇襲して「*魂*」と皮肉つてゐる (H. Schmitz, *ibid.*, S. 69)。
- (30) I. Kant, *ibid.*, A30=B46
- (31) I. Kant, *ibid.*, A31=B46
- (32) I. Kant, *ibid.*, A31=B47
- (33) I. Kant, *ibid.*, A31=B47
- (34) I. Kant, *ibid.*, A32=B48
- (35) ハイデッカーのように「だから無限の大ききとは「無制限の」大ききを意味するのではなく、ここでは「大きき」は、かくかくの大きき(「量」)を始めて可能にする大いさを意味する。」(M. Heidegger, *ibid.*, S. 49)と言つてみてもあまり役に立たない。
- (36) I. Kant, *ibid.*, B202
- (37) フッサールはカントと違つて「再生」という用語を「再想起」と同じ意味で使う。
- (38) M. Heidegger, *ibid.*, S. 164
- (39) M. Heidegger, *ibid.*, S. 165
- (40) M. Heidegger, *ibid.*, S. 169
- (41) M. Heidegger, *ibid.*, S. 169f.
- (42) in: K. Held, *ibid.*, S. 38
- (43) カントの〈知覚〉判断と〈経験〉判断との区別がこれに当たる (vgl. *Prolegomena*, § 18)。
- (44) この「時間」にしろとも該当する。 vgl. G. Brand, *Welt, Ich und Zeit*, M. Nijhoff, 1955, S. 138. Anm. 1
- (45) デイマーは「主観的な客観的時間」と相互主観的という意味での「客観的な客観的時間」とに分けてゐるが (A. Diemer, *ibid.*, 134f.)、この二分法では不十分であらう。